

7月12日 年間第15主日 マタイ13章1～23節 おおきなあれ、おおきなあれ

先週の福音朗読箇所のと、12章を飛ばして今日の箇所となります。ここではイエスの行動、いやしの奇跡とそれに対するファリサイ派の反応、人々への教えなどが記されています。12章の最後にイエスが血のつながりを越えた家族について語られているのは先々週の教えとつながっているのかもしれませんが。そして13章に入るとイエスは湖のほとりで人々に教えられます。

イエスは「種をまく人」のたとえ話を語られます。後半ではたとえを話す理由とたとえの説明がありますが、この部分は初代教会で付け加えられたものとも言われています。そこで、短い福音朗読の形(1～9節)のたとえの部分を中心に考えてみましょう。

種をまく、という畑を耕して穴を掘り、一粒ずつ埋めて水と肥やしをかけるというイメージがあります。ラジオで聞いたのですが、あるこども園では、クラスで野菜の種をまくときに、種を入れる係、じょうろで水をあげる係がいて、ほかの園児たちは「おおきなあれ、おおきなあれ」と声をかける係だそうです。それから考えると場所を考えずにまかれている今日の福音の種まきはなんだかおおざっぱでいい加減のように思えますね。あちこちにこぼれているようでもありますし。しかし、「福音のヒント」によると、日差しが強いパレスチナ地方では先に一面に種をまき、それから耕して種を土の中深くに埋め込むそうです。そうしないとすぐに干上がって枯れてしまいます。それなら納得ですね。

それで芽を出した種は少しずつ伸びていきます。イエスのたとえ話のように、順調に伸びる芽もありますが、いばらの木に邪魔されることもあり、また石だらけの土地でうまく育たないこともあります。種をみことば、土地をわたしたちと考えると、よい土地は生まれつきいい人、悪い土地は生まれつき悪い人と考えてしまうかもしれません。しかし、種には芽を出して伸びる力が込められています。農夫はつねに注意深く自分の土地をすみずみまで見回り、いばらや石に気づいたときに、それを取り除き、土が浅いならば土のある所に植え替えて、育つ力をサポートします。そのように農夫である神は芽がちゃんと育つように手入れしてくださるのではないのでしょうか。第一朗読と答唱詩編の内容もそのような神の思いを表しているといえるでしょう。ですから、わたしたちは「福音の種をまかれてもわたしには育てられない」とあきらめるのではなく、農夫である神に信頼してゆだねることが大切なのです。

福音の種は愛の種です。神は人を選んで種をまかれるわけではありません。わたしたちひとりひとりの心に愛の種がまかれています。そして、種が伸びてたくさんの実をつけるのはわたしがほめられるためではなく、みんなが喜ぶためです。小さな愛の種が大きくなって神の愛がどんどん広がることは神の喜びであり、わたしたちの喜びです。さあ、みんなで声を掛けましょう。「おおきなあれ、おおきなあれ！」(柳本神父)